

『愛の砂漠』における動物

横 山 昭 正

L'Image de l'animal dans *Le Désert de l'amour*

Akimasa YOKOYAMA

Résumé

L'Image de l'animal apparaît chez François MAURIAC sous les formes les plus diverses. Nous nous efforçons ici de décrire à travers cet univers des animaux au physique aussi bien qu'au moral l'horizon des désirs dont souffrent nos personnages. En ce qui concerne *Thérèse Desqueyroux*, l'héroïne compare son mari Bernard au porc au sens péjoratif tandis qu'elle se regarde comme son auge. La relation conjugale se change en partie de chasse : Thérèse n'est aux yeux de Bernard rien qu'une «proie accoutumée».

Il en est de même de l'aventure de Raymond dans *Le Désert de l'amour*. Ce «jeune mâle», identifié souvent au chien, se métamorphose, dès sa rencontre de Maria Cross, d'abord en chien de chasse, puis en bouc ou bouquetin, et enfin en faune ou chèvre-pied chasseur d'amour. Il nous semble que le rapport «chasseur / chassé (proie)» s'établit entre ces deux amants ainsi que les Courrèges, famille de Raymond. Il faut ajouter à ce sujet que ce rôle de chasseur et celui de chassé sont alternatifs, puisque Raymond se change en «oiseau sauvage et pur» ou en «faon, devenu familier» (proie angélique) sous les yeux de Maria, qui se considère par contre comme Orion, divinité de chasse (Diane chasserresse dans la mythologie romaine).

Dans l'univers imaginaire de ce roman, la société entière se transfigure en ménagerie («rien que des faces de bêtes tournées vers elle», *Le Désert de l'amour*), la famille en cage de même que le cas de Thérèse («une cage aux barreaux innombrables et vivants», *Thérèse Desqueyroux*). Il en résulte que tous les êtres humains y errent comme la bête sauvage en poursuivant leur éternelle chasse à l'amour convoité.

I. 動物

フランソワ・モーリヤック François MAURIAC (1885-1970) は人間の欲望の諸相を執拗に描いたカトリック作家であることはよく知られている。またさまざまな欲望, 特に肉欲に苛まれ, 弄ばれる人間存在をしばしば動物に喩えていることは, どの作品をひらいても直ちに気づく特徴の一つである。人間の物欲・金銭欲を主要テーマとする『蝮のからみあい』*Le Nœud de vipères* (1932) はタイトルが既にそうである。この論考では, 動物の比喩がことに豊富な『愛

の砂漠』 *Le Désert de l'amour* (1925) をとりあげ、その動物宇宙の特質を明らかにしたい。

1. テレーズ

たとえば『テレーズ・デスケイルー』 *Thérèse Desqueyroux*¹⁾ (1927) においても、ほとんどの人物が、その外観だけでなく動作に至るまで様々な動物に喩えられる。さらには、人物の形のない内面でさえ動物の形象を用いて描かれることがある。いくつか例をあげてみよう。新妻のテレーズにとって、夫のベルナールは「すてきな若い豚のように」 *comme ces jeunes porcs charmants*²⁾ 自分の快楽に閉じこめられた存在であり、「豚そっくりのせかせかとせわしない、まじめくさった様子をしている」 *Il avait leur air pressé, affairé, sérieux.*³⁾ その「豚どもが飼桶のなかで幸せのあまり鼻を鳴らすのを、格子ごしにながめるのはおもしろい」 *il est drôle de regarder à travers la grille, lorsqu'ils reniflent de bonheur dans une auge*⁴⁾ が、「その飼桶は私だ」 *«c'était moi, l'auge»*⁵⁾ とテレーズは考えるのである。ここでは、豚の暗喩に重ねて性行為が嫌悪とともにほめかされている。モーリヤックはまた、性行為を狩猟のようにとらえることがある。ベルナールにとって、知り合った頃のテレーズは「足もとにころがるなかなかの獲物」 *Une telle proie à ses pieds*⁶⁾ であり、結婚後は、「味わいなれた餌食」 *sa proie accoutumée*⁷⁾ に他ならない。

そのテレーズからみれば、家庭も「無数の生きた格子に囲まれた檻、耳と目で張りめぐらされた檻」 *cage aux barreaux innombrables et vivants, cette cage tapissée d'oreilles et d'yeux*⁸⁾ であり、「この檻のなかで、身じろぎもせず、うずくまったまま、顎を膝の上にのせ、両腕に脚をかかえて、死ぬのを待とう」 *où, immobile, accroupie, le menton aux genoux, les bras entourant ses jambes, elle attendrait de mourir*⁹⁾ と彼女は考える。ここには、「社会全体＝動物園」という暗喩が隠されており、テレーズは自らを家庭の檻のなかに閉じこめられ、絶えず見張られている獣とみなす。他者の監視の網に囚われ、逃亡をあきらめて

1) テクスト: *(Euvres romanesques et théâtrales complètes; I (1978), II (1979), III (1981), IV (1985), Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade.* 以下、引用については、巻数と頁数を示す。『テレーズ・デスケイルー』および『愛の砂漠』の訳はいずれも杉捷夫（新潮文庫版）によるが、全体にわたって字句を大幅に変えた。

2) II, p. 38.

3) *ibid.*

4) *ibid.*

5) *ibid.*

6) *ibid.*, p. 35.

7) *ibid.*, p. 45.

8) *ibid.*, p. 44.

9) *ibid.*

うづくまる女の姿は、猟で追いつめられた獲物のとるぎりぎりの防御のかたちに似ている。この、身を丸く縮めて他者と世界（＝猛獣）の攻撃に耐える姿勢は、他の作品にもくり返しあらわれる。（たとえば、『愛の砂漠』のマリア・クロス。〔VI. 横たわる女〕で詳しくふれる。）しかし、テレーズはいつも被害者（＝餌食）というわけではない。彼女自身、周囲の人間を餌食にし、同時に自らの存在をむさぼる獣に他ならない。

ベルナールの母親は、結婚前のテレーズを評して「あの娘は自分を痛めつけている」*elle se ronge*¹⁰⁾ という。(se) *ronger* の第一の意味は、ネズミなどの齧歯目の動物が「噛む」, 「かじる」である。未来の義母は、テレーズが「自分の胸のなかの爬虫類」*ce reptile dans son sein*¹¹⁾（＝彼女自身にもどうすることもできない虚無感）に噛み苛まれていることを見抜いていたのである。

他人をそこへ投げこむことを躊躇しなかった彼女が、虚無を前にすると棒立ちになる。

*Elle qui n'hésitait pas à y précipiter autrui, se cabre devant le néant.*¹²⁾

動詞 *se cabrer* は「(馬などが) 後脚で立つ」ことを意味する。テレーズの内面の動きが、ここでは馬のような動物のしぐさに喩えられているのである。テレーズはまた、保守的で息のつまるようなブルジョワの日常、閉ざされた家庭生活のなかに埋没している自分を、次のようにとらえる。(引用原文のイタリック体は、指示のない限りすべて筆者による。)

彼女はたった一人で、トンネルのなかを抜けているのだった。めまいを覚えながら。いまいるところがいちばん暗い場所だ。前後の考えもなく、けだもののように、この闇の世界から、この煙のなかから、逃げださなければならない、自由に呼吸のできる空気のあるところまで出なければならない。早く！ 早く！

*Elle traversait, seule, un tunnel, vertigineusement ; elle en était au plus obscur ; il fallait, sans réfléchir, comme une brute, sortir de ces ténèbres, de cette fumée, atteindre l'air libre, vite ! vite !*¹³⁾

この件りは、テレーズが実際に汽車（もちろん蒸気の、煙の出る列車）に乗っているときの

10) *ibid.*, p. 35.

11) *ibid.*, p. 36.

12) *ibid.*, p. 84.

13) *ibid.*, p. 73.

回想の続きをなし、語りの現在と回想の過去とが重ね合わされ、混じり合う場面であるが、ここでは「獣」brute はむしろ、脱出の盲目的なエネルギーを潜めた望ましい存在として描かれていることがよみとれる。

人間存在を、あさましい欲望につき動かされる卑小で醜惡な生物として描くとき、動物の、特に孳猛な肉食獣の比喩があらわれる。男女の恋愛や性行為は、「狩る者—狩られる者」のパターンでとらえられる。しかしこの比喩はいつも嫌悪や侮蔑をあらわすためだけでなく、好ましい、魅力ある対象を生き生きと示すために用いられることがある。テレーズは、ジャン・アゼヴェド——パリの香りを身につけ、ボルドー地方の閉鎖性からはみ出ているようにみえる、この野性的な若い知識人に脱出の夢をかきたてられる。(この辺りに、エンマ・ボヴァリーの夢の反響があると思われる。) テレーズは、彼を「この若い動物」ce jeune animal¹⁴⁾ と呼び、その口を「暑がっている若い犬の口」gueule d'un jeune chien qui a chaud¹⁵⁾ と形容する。犬の暗喩が侮蔑的でない意味に使われるのは、『テレーズ・デスケイラー』ではここだけである。

2. レイモン

『愛の砂漠』*Le Désert de l'amour* (1925) では、美貌の若者レイモン・クレージュは、多くの場合、活力にみちた動物に、時にみずみずしい植物に喩えられる。彼はとりわけ犬に近づけて描かれる。人間に従属していて人間よりも劣り、愛玩と虐待の対象にすぎないただの家畜のときもあれば、他者という動物を狩る獵犬になるときもある。彼は「大きな音をたてて、犬のように、スープをかぶ飲みにする」Il lampait sa soupe à grand bruit, comme un chien.¹⁶⁾ しかし、彼は「自分は犬ほども姉には関心をもたれていない」Il l'intéressait moins [...] que le chien¹⁷⁾ と考える。

その姉マドレーヌ・バスクも、動物にひきつけてとらえられる。彼女は家人の誰にもきこえない夫の足音を聞きとる。そして「雌ではなく雄が芳香を出して闇のなかで相手を引き寄せる、そういう別の動物の一種族に属しているかのように」comme si elle eût appartenu à une espèce différente des autres animaux, où le mâle non la femelle eût été odorant pour attirer la complice à travers l'ombre¹⁸⁾ 夫を迎えに出ると、二人で二階の部屋へ閉じこもる。「家人はみなその事を知っている」Ils savaient que [...] ¹⁹⁾ と話者はわざわざ書く。それは

14) *ibid.*, p. 58.

15) *ibid.*, p. 57.

16) I, p. 797.

17) *ibid.*, p. 744.

18) *ibid.*

19) *ibid.*

作者モーリヤックが作品との間に距離を置き、記述に客観性を与えるためでもあるが、家族というものは、たとえば若夫婦が肉の儀式（動物的行為）に浸ることを暗黙のうちに了解している制度にすぎないことを示すためと考えられる。

Ⅱ. 狩猟 (1)

さてレイモンであるが、恋愛の点では未だおとなしい日常の家畜にほかならなかったこの犬は、情欲につきうごかされると猟犬のように女性という獲物を狩り立て、追いつめる。このとき「犬」は、レイモンの外観のみならず内面——ことに情欲の動きを具体化する形象となる。マリア・クロスに出逢い、「自分の力に確信をもち、〔中略〕自分の肉体に確信をもち、肉体が所有できないものには無関心なこの武装の整った若い雄」*ce jeune mâle bien armé, sûr de sa force, [...] sûr de son corps, indifférent à ce que le corps ne peut pas posséder*²⁰⁾は、「汚れを知らぬ野鳥」*un oiseau sauvage et pur*,²¹⁾「世話をやいたために慣れてきた小鹿」*un faon, devenu familier à force de soins*²²⁾であることをやめる。（これらの暗喩はマリアの眼からみたレイモンであり、既にマリアも狩猟する者になっていることがそこに読みとれる。つまりレイモンとマリアは、恋愛において、二人とも「狩る者⇄狩られる者」という二重の役割りを演じることになるのだが、これについては後で詳しく考察する。）

だがレイモンは、自分が汚らわしい下心を持っていると思って疑いはしないだろうか。彼女は、そのレイモンが、彼女がそこに居なければなおさらよく彼女を楽しんでいるということを、どこへでも自分といっしょに女の面影を抱いて行っているということを、旺盛な若い犬が、女をつかんで放し、放してはまたつかんでいることを、知らなかった。

[...] *sa tournée en Belgique?... / Mais Raymond va la soupçonner d'une arrière-pensée immonde. Elle ne sait pas que ce Raymond jouit d'elle d'autant mieux qu'elle n'est pas là, qu'il la porte partout avec lui, qu'il la prend et la laisse et la reprend, jeune chien avide. / Le docteur*²³⁾

この箇所（/線内）は初出の『パリ評論』*Revue de Paris* 誌にはあったが、削除された。恋をしている若者が、相手の女性と離れたとき頭に描く性的なイメージを、狩猟に喩えて大胆に

20) *ibid.*, p. 804.

21) *ibid.*, pp. 804-805.

22) *ibid.*, p. 805.

23) *ibid.*, p. 1351.

とらえているが、余りに生々しすぎたために、マリアと、ひいてはレイモン自身を過度に汚すことを恐れて省いたのであろうか。いずれにしろレイモンは、マリアの館を二度目に訪れたとき、彼女の肉体を求める。しかし彼は、マリアが内心ではそれを望んでいながら拒絶し侮蔑したために深く傷つけられ、これを契機に「恥ずかしめられた若い雄」*jeune mâle humilié*,²⁴⁾「この不器用な半獣神ファウヌス」*ce faune maladroit*²⁵⁾は「猟人の本能」*cet instinct de chasseur*²⁶⁾をむき出しにしてサディスティックな女性遍歴に溺れてゆく。「彼女が変貌させ神化した者」*celui qu'elle avait transfiguré, divinisé*,²⁷⁾「天使」*ange*²⁸⁾とまで思いこんだことのある少年、

この少年が、やがて他の多くの女たちがその手管に接し、愛撫を受け、いや打たれたり蹴られたりするであろう一人の男になるのに、この形の整わぬ少年の上に彼女の視線が注がれるだけで十分だったということを、彼女は知る由もなかった。〔中略〕この時を境に、彼と女との未来の交渉の中にはすべて、ひそかな敵意が潜入するであろう、相手を傷つけずにいられない気持が、捕えた牡鹿をいじめて悲鳴をあげさせずにはいられない気持が混る。マリア・クロスの流すべき涙を彼は生涯ほかの女たちの頬の上に流させるであろう。

Elle ignorait que, sur cet informe enfant, son regard avait suffi pour qu'il devînt un homme dont beaucoup d'autres allaient connaître les ruses, subir les caresses, les coups. […] Désormais, dans toutes ses intrigues futures, se glisserait une inimitié sourde, *le goût de blesser, de faire crier la biche à sa merci*; ce seraient les larmes de Maria Cross que toute sa vie il ferait couler sur des figures étrangères.²⁹⁾

既にみたように、レイモンは一時期マリア・クロスによって狩られ、馴らされた小鹿 (faon) であったが、今や彼が残酷な猟人となって女性という獲物に襲いかかることになる。17年後(この小説の語りの現在)、パリのとあるバーで再会したマリアの傍らで過去の回想にふけるときの、彼は猟犬のようである。

24) *ibid.*, p. 824.

25) *ibid.*

26) *ibid.*

27) *ibid.*, p. 826.

28) *ibid.*, p. 804.

29) *ibid.*, p. 826.

とはいえ、混沌とした過去の中から、本当に彼のものになったのは、厚い闇に包まれて一気に駆け抜けた一条の細い道に過ぎない。地面に鼻面をつけて、自分の足跡をたどったが、自分の足跡と交差した他のすべての足跡のことはまるで知らないでいる……。

Pourtant, ce qui, du passé confus, lui appartenait en propre n'était qu'une mince route vite parcourue entre d'épaisses ténèbres ; *le museau à terre, il avait suivi sa piste, ignorant toutes les autres qui croisaient la sienne...*³⁰⁾

恋愛にはつきものの美化と神格化の働きによって、マリアはレイモンを天使 (ange) と考えようとしたが、実は半獣神ファウヌス (faune) を生み出す結果に終わったわけである。彼女は自らを美化し神聖視するほど素朴ではないが、神格化したレイモンの姿を通して、自らの浄化を願っていた。そのことが、レイモンとの肉欲の泥沼に彼女が入りこむことを辛うじておしとどめる要因の一つになったといえるかもしれない。

マリアには、自己の神格化はみられないが、神話化はあった。

恐ろしい快楽を味わいながら、彼女は自分と自分で必死に清純だと思い込んでいるものとのあいだの深淵を広げた。神話の狩猟家オリオンと同じくらい自分の愛の対象から遠く離れて、近づきたいこの少年に思いをこがした。

Avec un horrible plaisir, elle élargissait l'abîme entre elle et celui qu'elle s'acharnait à croire pur : aussi loin de son amour que *le chasseur Orion*, brûlait cet enfant inaccessible :³¹⁾

オリオン³²⁾をめぐる伝説はさまざまで、その生まれと死についても幾通りもの説がある。ボイオティアの巨人で、美貌の狩人オリオンはキオスでオイノピオン王の娘メロペーに恋し、誘惑しようとするが、王はこらしめのために彼を盲目にする。彼はオリエントへゆき太陽の光を浴びて視力をとりもどす。その後アルテミス（ローマ神話のディアナ・狩と月の女神）と狩をして暮しているうちに、曙の女神エオスがオリオンを恋して奪ったので、アルテミスは嫉妬から彼を矢で射殺す。ホラティウスは、彼がアルテミスを犯そうとしたので、処女神のアル

30) *ibid.*, p. 842.

31) *ibid.*, p. 819.

32) Joël SCHMIDT, *dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, Larousse, 1970, p. 227.

テミスは彼をサソリに殺せたと主張する。他にも幾つか説があるが、オリオンはアルテミスに殺されたこと、死後は星座になったことではどの説でも一致している。とすれば、アルテミスがレイモンに重ね合わされているのかどうか、問題になってくるが、その解釈はここでは成立しないと考えられる。(たとえば、レイモンはマリアを殺さない。) 結局、渴望的であるレイモンからオリオンの星座と同じくらい遠く離れようとしているマリアが、神話化して描かれたにすぎない。重要なのは、マリア自身がレイモンとの恋愛を一貫して狩猟と受けとめていることである。また同時に、レイモンの存在を、彼女を外からも内からも埋めようとする砂漠のなかで、渇きを癒し憩わせてくれるオアシスとして渴望していることも指摘しておきたい。

レイモンがしばしば犬のような存在として描かれていることは既に見てきたが、マリアにとって彼は汚れを知らない野鳥であり、小鹿であった。『愛の砂漠』では、人間が植物に喩えられることは余りないのだが、レイモンは別の箇所ではみずみずしい果実としてマリアの眼に映る。「この果実が彼女のかわきから遠ざけられなければならないものとすれば、その未知の味を空想することをなぜ遠慮するのか？」 *Si ce fruit doit être écarté de sa soif, pourquoi se priver d'en imaginer la saveur inconnue ?*³³⁾

マリアは電車の中での初対面のときからレイモンに惹かれ、彼を「観察する」 *Comme elle l'observait pourtant !*³⁴⁾ このとき早くも彼の顔に「天使」の面影をみとめる。

「この顔は、誰でも乗る車の中で過ぎなければならないみじめな数分のあいだ、私を慰めてくれる。私はこの天使めいた陰気な顔の周囲の世界を抹殺する。なんにも私を傷つけることはできない。見つめることは気持を解き放ってくれる。この少年は見知らぬ国のように私の前にある。あの臉は荒された海の岸だ。明けやらぬ暁闇の中の二つの湖水がまつ毛の林のふちにまどろんでいる。指についているインク、ねずみ色のカラーとカフス、それにちぎれているあのボタン、それらは、とつぜん枝から離れ、用心深い手でおまえが拾い上げるあの無疵の果物を汚す土でしかない」

《Ce visage va me consoler des minutes misérables qu'il faut vivre dans une voiture publique ; je supprime le monde autour de *cette sombre figure angélique*. Rien ne peut m'offenser : la contemplation délivre ; il est devant moi comme un pays inconnu ; ses paupières sont les bords ravagés d'une mer ; *deux lacs confus sont assoupis aux lisières des cils*. L'encre sur les doigts, le col et les manchettes gris, et ce bouton qui man-

33) I, p. 818.

34) *ibid.*, p. 766.

que, cela n'est rien que la terre qui souille *le fruit intact, soudain détaché de la branche, et que, d'une main précautionneuse, tu ramasses.*》³⁵⁾

「二つの湖水がまつ毛の林のふちにまどろんでいる」という両眼の暗喩は、ボードレールのつぎの詩句を想起させる。（「イツモ同ジク」³⁶⁾、『悪の花』XLI, イタリックはボードレール。）

お願いだ、私の心が嘘に酔いしれるがままに
美しい夢に沈むにも似てあなたの美しい眼にひたるがままに
あなたの睫毛の陰に長くまどろむがままに、任せたまえ。

Laissez, laissez mon cœur s'enivrer d'un *mensonge*,
Plonger dans vos beaux yeux comme dans un beau songe,
Et sommeiller longtemps à l'ombre de vos cils !

Semper eadem, in *Les Fleurs du Mal*, XLI.

マリアは、彼女がいつも願っている「彼女の砂漠」*son désert*³⁷⁾からの脱出の夢がかなえられるかもしれない相手に出逢えたのだが、その少年を彼女は「果樹」に等しい存在として受けとめている。マリアはそれが「偽りのイメージ」*fausse image*³⁸⁾に他ならず、「美しい夢」に似た一つの「嘘」に終ることは知っていても、「彼女の天使(=レイモン)に執着する」*elle tanait à son ange*³⁹⁾しかない。

面白いことに、レイモンもマリアのことを果実のように考えている箇所がある。「いくらかぼってりした、厚い唇——奇蹟によってまだ無疵のままの果物」*La bouche un peu forte, épaisse—fruit par miracle intact encore*—⁴⁰⁾

だが、彼は間違ふことのない知恵で知っている、彼女が星の世界よりも遠い触れることのできない存在になったことを。そのときだった、彼女が美しいことに彼が気づいたのは。この果物が自分のものになるということを一瞬といえども疑ってみることをせず、いかに

35) *ibid.*, pp. 766-767.

36) 阿部良雄訳、『ボードレール全集』I, 筑摩書房, 1983, p. 81.

37) I, p. 818.

38) *ibid.*, p. 805.

39) *ibid.*, p. 804.

40) *ibid.*, p. 844.

して摘みとり、いかにして食べるかを知ることのみ没頭していたときは、女の顔をゆっくり見たことさえなかったのである。——目でむさぼり食うことだけが今お前に残されている。

[...] mais il savait d'une science sûre que désormais il ne la toucherait pas plus qu'une étoile. Ce fut alors qu'il vit qu'elle était belle : tout occupé de savoir comment *cueillir et manger le fruit*, sans mettre une seconde en doute que *ce fruit* lui fût destiné, il ne l'avait jamais regardée ; — cela te reste maintenant de *la dévorer des yeux*.⁴¹⁾

若くてみずみずしい存在、まだ汚れを知らない清浄な存在が、小動物や小鳥でなければ樹木に喩えられることは自然である。レイモンが家族のなかで心を許して愛撫したがるのは、姉の子供たちだけである。四人の小さな女の子たちは、「馴れた小鳥が止り木の上に並ぶようにくっつき合って並んでいる」elles étaient serrées telles que des oiseaux apprivoisés sur un bâton.⁴²⁾ これに対して、レイモンが子供と荒っぽく戯れるのが気にいらぬ母親のマドレーヌは、「心配して毛を逆立てる雌鳥」poule hérissée et inquiète⁴³⁾である。ところが夏のヴァカンスになると、マドレーヌ一家が避暑に出かけるのでレイモンには「彼が好んで荒々しく遊び戯れた、植物のようにしなやかな子供たちのあの肉体さえ残されていなかった。」il ne lui restait plus même le corps d'enfants souples comme des plantes avec lesquels il aimait à jouer sauvagement.⁴⁴⁾

モーリヤックの世界にとって、こうした子供の存在は重要であり、大きなテーマとしてとりあげられるべきだと思われる。

少し横道にそれたが、再び狩猟のテーマを、マリアに視点を置いて考えてみたい。マリアは夫との死別を境に娼婦まがいの生活を送り、世間からは常に白い眼で見られてきた。たとえば憂さばらしに入った「アポロ」のマチネで「例のごとくただ一人で、小屋中の人間の注意を一身に集めていると」seule comme toujours et attirant sur soi l'attention de toute la salle,⁴⁵⁾ 親友だった女友達の罵声が聞こえてくる。

自分の机敷にすぐくっついて椅子席の一行から、ガビの鋭い笑い声が聞え、続いて何

41) *ibid.*, p. 825.

42) *ibid.*, p. 745.

43) *ibid.*

44) *ibid.*, p. 755.

45) *ibid.*, p. 813.

人も笑い声が、小聲で吐き出されるきれぎれの罵詈雑言が、聞えた。「ふん、あの淫売が、皇后さまみたいな面をしてさ……ふん……乙に澄ましやがってね……」マリアには小屋中の人間の顔が見えなくなったような気がした。みんな自分のほうに向いている獣の顔のような気がした。

[...] elle avait entendu, d'un rang de fauteuil qui touchait à sa baignoire, jaillir le rire aigu de Gaby, d'autres rires, des lambeaux d'injures proférées à mi-voix : 《 Cette traînée qui joue à l'impératrice... cette... qui le fait à la vertu... 》 Il semblait à Maria qu'elle ne voyait plus aucun profil dans la salle : *rien que des faces de bêtes tournées vers elle*.⁴⁶⁾

マリアはこのように、ボルドー地方の保守的なブルジョワたちの冷たい視線の恰好の餌食にされる。彼女はいつも、他者という獰猛な獣に狩られる獲物として生きてきた。しかし、レイモンに会ってからは、今度は彼女が狩る側にまわることになる。二人の恋愛の少なくとも初期のあいだは、それまで猟犬のようであったレイモンが、既にみたように狩られる側の小鹿や野鳥に変わる。

非常な用心深さで、汚れを知らぬ野鳥でも捕えるように、彼女は抜き足さし足で、息を殺しながら近づく。

*Avec des précautions infinies, comme d'un oiseau sauvage et pur, elle s'en approchait sur la pointe des pieds, et retenant son souffle.*⁴⁷⁾

このこっそりと獲物にしのび寄るマリアの姿は、まさしく獵人のそれである。次に会った時も、マリアは同じようにふるまう。

それからマリアは、カーテンをしめきったこの客間の中に人に馴れない子鹿を捕らえたかのように、嬉しさにぞくぞくしながらも、どんな身振りに出る勇気もなかった。

Et Maria, toute frémissante, comme si elle eût retenu entre les murs du salon,

46) *ibid.*, pp. 813-814.

47) *ibid.*, p. 805.

étouffés d'étoffes *un faon effarouché*, n'osait aucun geste.⁴⁸⁾

だがここにみられるように、狩る側のマリアが「どんな身振りに出る勇気もなかった」場合、彼女はたちまち狩られる側にまわる。レイモンが、捕獲された小動物から、狩猟者（あるいは猟犬）に変わってゆく。

ここまでの考察を整理してみよう。レイモンはマリアとの恋愛を契機に、ただの「犬」（家族からみて）から「猟犬」に変貌する。（マリアを獲物として、初めは空想のなかで。しかし実際に狩る行為に入ったとたんにマリア〔＝獲物〕の反撃にあい、傷つく。）同時に、一方で彼は可憐な小動物（＝マリアの獲物）とみなされていたが、マリアを所有しようと望んで「半獣神ファウヌ」（＝好色な狩人）に変貌する。この変貌は実は予感されていたのであって、レイモンの父ポール・クレージュ博士（彼もまたマリアを所有しようとしている狩人である）は、息子がマリアに恋していることに気づくときがやってくる。

ブーカン（書物）がブークタン（アルプス山羊）という言葉をも彼の頭によびさました。と、彼はマリア・クロスのそばに、サチュロス神がすっと立ち上がるのを見た。

Bouquin éveilla dans son esprit le mot *bouquetin* ; et il vit se dresser, auprès de Maria Cross, *un chèvre-pied*.⁴⁹⁾

この *chèvre-pied* は「山羊の足をした」という形容詞で、名詞としては「サチュロス神」（＝*Satyre chèvre-pied*）の意に用いられる。（なお初出の『パリ評論』では、「野性の若い雄山羊」*un jeune bouc sauvage*⁵⁰⁾となっていた。*chèvre-pied* とする方がその神話化によって、若いレイモンの欲望のはげしさをより明確に暗示すると思われる。）サチュロス⁵¹⁾はギリシャ神話の山野の神で、人間の体に山羊の角と脚をもつ半獣神。時にシーレーノスとも呼ばれ、ローマ神話の「ファウヌス神」*faune* と同一視される。ちなみにギリシャ神話の「パン（牧羊神）」*Pan* もまた、ファウヌス神と同一視されることがある。

マリアもまた、「半獣神ファウヌス」に変貌し、「狩人の本能」をあらわし始めたレイモンをみて、「あのけだもの」*cette brute*⁵²⁾と呼び、「あの小さな雄山羊が段階（＝恋愛の諸段階）

48) *ibid.*, p. 815.

49) *ibid.*, p. 808.

50) *ibid.*, p. 1353.

51) Joël SCHMIDT, *op. cit.*, p. 276.

52) I, p. 828.

を一足飛びに越えてしまった」le petit bouc a brûlé les étapes⁵³⁾）と思い悩む。（この表現は『パリ評論』にあり、後に「小さな雄山羊」le petit bouc が「不器用者」le maladroit⁵⁴⁾）に変えられた。）事実、レイモンは初めてマリアを家に訪ねる数日前、彼女の肉体を所有する想像にふけりながら、「アルプス山羊のように身軽に、植込みを飛び越えた」il [...] sauta un massif, aussi agile qu'un bouquetin⁵⁵⁾）と描かれており、彼はすでに父ポールの予感どおりに半獣神（サテュロス、あるいはファウヌス）に変身しつつあったのである。

Ⅲ. 狩猟（2）

マリアとレイモンの恋愛は狩猟に似ており、二人の関係は、猟犬（あるいは猛獣）と獲物（あるいは餌食）とのそれ、「狩る者」と「狩られる者」（この両者は状況により入れ替わる）のそれとしてとらえられることが明らかになった。同じような関係は、ポールとマリアとのあいだにも見出される。ポールはマリアの主治医であるが、彼女のパトロン（後の夫）のラルッセルはいみじくも次のように言う。

あなた方医者にとって実にいい獲物ですな、神経衰弱の連中は、あの気病みの連中は。

Quel gibier pour vous autres médecins, ces neurasthéniques, ces malades imaginaires.⁵⁶⁾

このセリフには、ポールのマリアへの恋愛感情を見抜いているラルッセルの揶揄がまじっていると思われるが、そのポールをマリアは心の底では嫌っているが、時に優しくして手許に引き寄せ、また冷たく突きはなす。マリアに翻弄され、「消耗して、彼は、その夏、息子を観察する余裕がなかった」Mais, ainsi dévoré, il observait moins son fils, cet été-là⁵⁷⁾）のである。「消耗して」と訳した dévoré は、動詞 dévorer の過去分詞。dévorer には「歯で裂きながら食べる」、「食べつくす」、「がつつむさぼる」などの意があり、もちろん精神的な意味にも用いられる。いずれにしろこの動詞は、ライオンやトラなどの肉食獣とその餌食を想起させるのである。ポールも、想像のなかではマリアを手に入れて一緒にになり、そのことのためには家族の抹殺さえ夢みるのだが、彼女の前に出ると立場は逆転して、狩られる獲物のようになって

53) *ibid.*, p. 1353.

54) *ibid.*, p. 828.

55) *ibid.*, p. 812.

56) *ibid.*, p. 769.

57) *ibid.*, p. 757.

てしまう。

同じような狩猟の関係は、家族のあいだにも見出される。ポールにとって、息子のレイモンは手許に捕らえたい獲物であるが、彼がそれを望むときは息子に逃げられ、息子が捕らえられたがっているときはそれに気づかない。

それはことによったら二人が互いに近づくことができたかもしれないときだったのである。が、そのときのドクトルは、彼があのようにしばしば捕えることを望んだこの男の子から遠くかけはなれて考えごとをしていた。若い餌食は、今、自分から彼の懷ろに飛びこもうとしている、しかも彼はそれを知らないのだった。

Voici, la minute où ils eussent pu se rapprocher, peut-être. Mais le docteur était alors en esprit bien loin de ce garçon, *dont il avait si souvent voulu la capture ; la jeune proie s'offrait à lui*, maintenant, et il ne le savait pas ;⁵⁸⁾

ポールは、この息子の「体温を感じ、その若い動物の体臭を感じていた」*il sentait sa chaleur, son odeur de jeune animal*⁵⁹⁾ ときも、息子と理解し合うことができない。

IV. む さ ぼ る

この父と子がパリで久しぶりに出会い、和解する場面がある。以後、二人が会うことはない——おそらくまもなくポールが亡くなる——と思われる最後の別れの場面で、ポールは「この男の子に、むさぼるように見入る」*dévorait dex yeux ce garçon*.⁶⁰⁾ ポールとマリアとの関係をあらわすとき用いられた「むさぼる」*dévorer* という動詞が、ここでも重要な役割りを果たしている。

『愛の砂漠』の人物たちはみな、愛に飢えていて、お互いに激しく求め合っているのだが、この愛し愛されたい、所有し、所有されたいという欲望につきうごかされる人間同士の関係は、既にみたようにたいい狩猟者と獲物、猛獣と餌食（小動物など）の関係に似てくる。人々はほとんどみな、動物の相貌を帯びてくる。テレーズもいうように、「欲望が、私たちのそばへ寄る人間を、似ても似つかぬ怪物に変えてしまう」*Mais le désir transforme l'être qui nous*

58) *ibid.*, p. 752.

59) *ibid.*, p. 803.

60) *ibid.*, p. 862.

approche en un monstre qui ne lui ressemble pas⁶¹⁾ からである。マリアも「飢えのために、欲望のために醜く変わった人間の顔」la face humaine enlaidie par la faim, par le besoin,⁶²⁾ 「あのけだもの」Cette brute⁶³⁾ を嫌悪する。そして次のように考える。

恋心でいっぱい男たちも、彼らの中にうごめいているけだものの外貌を、しばしば目をそむけたいような、そしていつもおそろしいあの外貌を、ぴったり顔にくっつけているのだ。

[...] les hommes pleins de leur amour ont aussi, collée à la figure, *cette apparence souvent hideuse, toujours terrible de la bête qui remue en eux*.⁶⁴⁾

彼らは互いに獣のようにむさぼりあう。むろん彼らは、人間として実際に他者の肉を食べることはできない。心の中で、視線で、渴望の対象をむさぼるしかない。「マリア・クロス……今レイモンをむさぼるようにながめているのがその女だった」Maria Cross... c'était elle qui le dévorait des yeux maintenant.⁶⁵⁾ ポールが、不在のマリアを想像のなかで狩り立て、弄ぶ場面を「Ⅱ．狩猟(1)」でとりあげたが、マリアも、レイモンと別れたあと初めて彼(の面影)を思いきり食べ、これと一体化することができる。

彼女は心の中でレイモンをむさぼり食べた、それからついこのあいだまでは恥ずかしさのためにいたたまらなくなったであろうようなある種の思い出を。

Elle se repassait de Raymond et de souvenirs qui naguère l'eussent accablée de honte.⁶⁶⁾

ここに用いられた「むさぼり食べる」se repaître は、dévorer の類義語である。

上の引用とは逆に、レイモンがマリアをむさぼるという表現は、既に、彼がマリアを果物としてとらえる場面で出てきた。「目で彼女をむさぼり食うことだけが今お前に残されている」

61) Ⅱ, p. 38.

62) Ⅰ, p. 827.

63) *ibid.*

64) *ibid.*

65) *ibid.*, p. 796.

66) *ibid.*, p. 819.

cela te reste maintenant de la dévorer des yeux.⁶⁷⁾ これは、レイモンにとってマリアが決定的に無縁の存在となったときのことである。同じ表現は、ラルッセルの息子ベルトランにも用いられている。「きまじめでうぶなベルトランは、レイモンのそばを通るときには、この“不良”をむさぼるように見た」le pieux et pur Bertrand dévorait des yeux, lorsqu'il passait près de lui, le «sale type» [...].⁶⁸⁾

このように『愛の砂漠』に登場する人々は、視線で、想像力の世界で、渴望の対象を肉食獣しながら「むさぼり食う」のだが、満たされることはないように思われる。

V. 動物・狩猟

もう一度、動物および狩猟の視点から、人物をみておきたい。レイモンが犬に喩えられたとき、どちらかというとなが、軽蔑的な意味をになわされていたのであるが、つねにそうであるわけではない。たとえばポールも犬に喩えられることがあるが、次の場合、研究に忠実で熱心な医学者のイメージが鮮明に浮かぶのではないだろうか。

自分をかじる隠密な敵からどんなことをしても心をそらすことができないのは女性の大きな不幸である。一たん顕微鏡にとりついたが最後、ドクトルは自分のことも外界のこともいっさい忘れてしまい、観察するものの虜になりきってしまう。ちょうど獲物を見つけて立ち止る犬がその獲物の虜になるように。

C'est la grande misère des femmes que rien ne les détourne de *l'obscur ennemi qui les ronge*. Alors qu'occupé à son microscope le docteur ne sait plus rien de lui-même ni du monde, prisonnier de ce qu'il observe, *comme de sa proie un chien à l'arrêt* [...].⁶⁹⁾

ここでは、医学者としての研究も狩猟の暗喩でとらえられている。「自分をかじる隠密な敵」*l'obscur ennemi qui les ronge* とは、満たされない欲望の苛立ちや、所有できない渴望の対象への不安などを指すと思われるが、この表現自体はボードレールの次の詩句に由来しているに違いない。(「敵」⁷⁰⁾、『悪の花』X)

67) *ibid.*, p. 825.

68) *ibid.*, p. 795.

69) *ibid.*, p. 804.

70) 阿部良雄訳, *op. cit.*, p. 32.

——おお苦痛！ おお苦痛！ 〈時間〉は生命を食らい、
そしてわれらの心臓をかじる隠密な〈敵〉は、
われらの失う血を吸っては、大きく、強くなるばかり！

—— O douleur ! ô douleur ! Le Temps mange la vie,
Et l'obscur Ennemi qui nous ronge le cœur
Du sang que nous perdons croît et se fortifie !

L'Ennemi, in Les Fleurs du Mal, X.

この詩における「敵」が何を指すのかについては、いくつかの説があるが、「時間」と考えるのが妥当である。従って、眼に見えない「時間」が、餌食をむさぼる動物のイメージによって具象化されているのである。上記の引用（モーリヤック）の場合、我々を本来の仕事から遠ざける憂慮（それが我々の生の時間を侵蝕している）が「敵」であると考えられているのであろう。そうした憂慮から解放されたとき、ポールの精神は自在さを取りもどす。

すると、彼の精神は、見失ってはまた見つけ、こんがらかってくる思惟の足跡の上をさまよう、ちょうど猟犬が、散歩するだけで狩をしない主人のまわりを飛び回って藪をあさるように。

[...] et son esprit errait sur *ces pistes perdues, retrouvées, emmêlées, comme un chien bat les buissons autour de son maître qui se promène, mais ne chasse pas.*⁷¹⁾

ここでは、猟犬に喩えられた精神が、女性を獲物とする狩猟に従わないときは、どんなに生き生きと自由に働くかが示されている。このとき、精神は豊かな実りを約束される。「彼はやすやすと論文をいくつも作る、後は筆をおろして書きさえすればよいのだ」Il composait sans fatigues les articles qu'il n'aurait plus qu'à écrire.⁷²⁾

ここで、ポールの動作の癖を一つ指摘しておきたい。彼は時々、何か眼に見えないものを追ひ払いしぐさをする。自分の周囲のじゃまものがはっきりしているときもあるが、無意識に行うこともある。

71) I, p. 829.

72) *ibid.*

彼は食事の最中に入ってくる、雑誌を一束かかえて。合図は聞えたのですかとクレージュ夫人が訊く。こんなに食事がただらでは、女中を居つかせようにも方法がない、と言う。ドクトルは蠅でも追い払うように頭を振って、雑誌を一冊広げる。

[...] il entrait au milieu du repas, avec un paquet de revues. Sa femme lui demandait s'il avait entendu sonner, déclarait qu'avec un service si décousu il n'y avait pas moyen de garder un domestique. *Le docteur remuait la tête comme pour chasser une mouche*, ouvrait une revue.⁷³⁾

「追い払う」chasser は本来「動物を狩る」という意味の動詞である。ここに狩猟のイメージが隠されている。彼の除去したいものは、日常の煩いであり、その中に深く埋もれている妻リュシーの、砂漠のように味気ない不平不満の訴えである。(このポールのしぐさは、夫婦の越えがたい乖離を生み出した無関心の象徴でもある。)

そうして彼女は蠅よりもっとうるさい注意でドクトルを悩ますのだった。

[...] et elle entourait le docteur de rappels *plus harcelants que des mouches* [...] ⁷⁴⁾

リュシーが蠅よりもうるさい存在になった原因の一つは、ポールの愛情の欠除である。「(妻は何年も前からその愛情において傷つけられている」 *bien qu'elle fût depuis des années froissée dans sa tendresse.*⁷⁵⁾ 彼女は夫の愛を取り戻そうとして、かえって(我しらず)夫を遠ざけるような言葉を吐いてしまう。すぐに悔んで、夫にまとりついて、その機嫌をとろうと無器用に努める姿は、哀れというよりいじらしい。「われにもあらず積み重ねたあさましい言葉」(des) *misérables paroles qu'elle accumulait en dépit d'elle-même*⁷⁶⁾ に気がつくと、彼女は後悔する。「私、何を変ったことを言ったかしら」《*Qu'est-ce que j'ai dit d'extraordinaire?*》⁷⁷⁾、「私また何を言ったのかしら? あなたって方は、すぐに腹をお立てになるのね」《*Qu'est-ce que j'ai encore dit? Tout de suite, tu te hérisses.*》⁷⁸⁾

73) *ibid.*, p. 745.

74) *ibid.*, p. 760.

75) *ibid.*

76) *ibid.*, p. 790.

77) *ibid.*, p. 750.

78) *ibid.*, p. 752.

ところでこの「腹を立てる」*se hérissier* という動詞も小説中でくり返し用いられるが、これは「ハリネズミ」*hérisson* に由来し、動物が「(毛や羽根を) 逆立てる」の意がある。人物たちの情念の動きが、動物のしぐさによって具象化されているのである。

さてポールは、めずらしく妻リュシーを庭の散歩に誘ったときも、彼女の卑俗な言葉に失望し、急いで書斎にもどると、癖になったしぐさをする。

書斎で、やっと、テーブルの前に坐り、憔悴した顔を両手でこねるようにした。それからもう一度、何かを払いのけるしぐさをした。

Là, enfin, assis devant la table, il pétrit à deux mains sa face exténuée, puis il fit encore le geste de débayer...⁷⁹⁾

そっくり同じ動作が、17年後、パリでレイモンに会ったときもくり返される。

ポールはまた、マリア・クロスの部屋でも同様のしぐさをみせる。マリアに冷たくあしらわれ、傷ついたポールは、彼女との関係を清算し、「すべての欲望、すべての希望を自分からもぎとる」(*pour*) *arracher de lui tout désir, tout espoir*⁸⁰⁾ ことに努め、次のように考える。

よろしい、わかった、これでおしまいだ。この女にかかわるすべてのことは、今後自分とは無関係になる。自分は勝負から抜けたのだ。彼の手は、虚空に、カードを片づけるしぐさを描いた。

Hé bien, oui, c'était fini ; tout ce qui touchait à cette femme ne le concernait plus ; il était hors du jeu. Sa main fit dans le vide le geste de débayer.⁸¹⁾

彼は家に返る途中、同じ動作をくり返す。「彼はもう一度、カードを片づけるしぐさを、不要な物を取り払うしぐさをしかけた」*Il ébaucha encore le geste de débayer, de faire place nette.*⁸²⁾

ここで、夫婦の関係、また老母と息子の関係も、狩猟として描かれていることを指摘してお

79) *ibid.*, p. 791.

80) *ibid.*, p. 787.

81) *ibid.*

82) *ibid.*, p. 788.

きたい。

リュシーは、前にもふれたように、ポールの機嫌を損ねてはその回復に努める。

昨日あったような夫婦げんかの後では、彼女は夫のまわりをうろつく、その愛を取りもどそうとして。

Après une scène comme celle de la veille, elle rôdait autour de son mari, cherchant à rentrer en grâce.⁸³⁾

彼女の行為は、主人の寵愛を得ようとする動物のそれに似ている。が、企てはいつも失敗に終る。ポールが病気で倒れたとき、妻リュシーと母のクレージュ夫人は彼を捕獲できて幸せに思う。マリアの所有を断念したポールにも、それは幸せに感じられる。

母親がそばにいてくれることは楽しかった。だが、妻がそばにいることも楽しかった。それを自覚するのは楽しいことだった。息の切れる追跡のあとで、ついに動けなくなり、リュシーに追いつかれるにまかせたのだった。あらゆる摩擦を避けようとして母親がどんなに自分を抑えているかをみて驚嘆した。一時ではあるが、職業から、研究から、彼女らの知らない恋愛から奪い返したこの獲物を、二人の女は争わずに分け合った。獲物はじたばたしない。彼女らのちょっとした言葉にも関心をもち、その世界は彼女らの世界に釣合うように狭くなっている。

La présence de sa mère lui était douce, mais aussi celle de sa femme, et ce lui était une douceur de s'en aviser : immobile enfin, après *une poursuite épuisante*, il se laissait rejoindre par Lucie ; il admirait comme sa mère s'effaçait pour éviter tout conflit : *les deux femmes se partageaient sans dispute cette proie arrachée* pour un temps au métier, à l'étude, à un amour inconnu, et *qui ne se débattait pas*, qui s'intéressait à leurs moindres paroles, dont l'univers se rétrécissait à la mesure du leur.⁸⁴⁾

家の外で狩猟を続けている男（マリアのような女性だけでなく、研究に対しても彼は猟犬に喩えられていた）も、疲れて家庭の罨にもどることを、女たちは本能的に知っていたかのよう

83) *ibid.*, p. 751.

84) *ibid.*, pp. 829-830.

である。

Ⅵ. 横たわる女

ラルッセルとうまく結婚できて、何不自由ないブルジョワの安定した生活に入るまでのマリアには、謎めいた魅力があり、ポールとレイモン父子はこの獲物を捕えようと狩りに出かけ、逆に狩られる(chasser される=追い払われる)ことになる。

マリアは、ラルッセルにあてがわれた館で怠惰な生活を送るが、ポールやレイモンを迎えるとき、ほとんどいつも長椅子に横たわり、たいていは本を読んでいる。ポールという医者に対しては、それは患者のとる姿勢であり、ある意味では自然なものといえるかもしれない。だが、他方でこれはマリアが外の、他者の世界から強いられた姿勢であると同時に、彼女が半ば意図してとる、作りものの、欺瞞の姿勢であると考えられる。

まずこれは、労働を拒否する怠惰の姿勢である。嘘がまじっているかもしれないが、マリア自身、ポールに対して次のように自己分析をしてみせる。

私を破滅させたのは生活の不如意ではなく、ことによったら一ばん卑しいものだったかもしれません。立派な地位がほしいという気持ち、身を固めているという安心感……それに今、私を「彼」(＝ラルッセル)のそばに引きとめているものは、もう一度始めなければならぬ戦いを前にして尻ごみする気持ち、働くこと、お金にならないつらい仕事を前にして尻ごみする気持ちです……

[...] ce n'est pas le besoin qui m'a perdue, mais peut-être ce qu'il y a de plus vil : le désir d'une belle position, la certitude d'être épousée... Et maintenant, ce qui me retient encore auprès de "lui", c'est cette lâcheté devant la lutte à reprendre, devant le travail, la besogne mal payée...⁸⁵⁾

ポールは、レイモンにむかって、マリアの「《ぜいたくと貧乏の同居する》客間」le salon 《luxue et misère》⁸⁶⁾での生活を次のように説明する。つまり、「癒すことのできないものぐさ」une indolence inguérissable⁸⁷⁾と、マリア自身の言う「自棄的なげやりの気持ち」non-chalance désespérée⁸⁸⁾(イタリックは作者)から、ラルッセルの「囲われ者」poule au

85) *ibid.*, p. 775.

86) *ibid.*, p. 774, et aussi p. 761.

87) *ibid.*, p. 802.

88) *ibid.*

patron⁸⁹⁾ (パトロンのメンドリ) になったと。「破れた部屋着をはおり、素足にスリッパをひっかけたまま、一日じゅう本を読んでいる方が好きだった」 Elle préférait lire toute la journée, vêtue d'une robe de chambre déchirée, les pieds nus dans ses pantouffles⁹⁰⁾ マリアは、「インテリ女性」intellectuelle⁹¹⁾ を気取る。これは、自分を娼婦と言って侮蔑する世間への虚勢、精一杯の抵抗とみることもできよう。

ドクトルはノックもせず客間へ入った。横になっていたマリアは起きあがりもしなかった。それどころか彼女は、しばらくのあいだ、本を読みつづけた。それから、「さあ済みました。先生、お相手できますわ」こう言って両手を差し出し、彼が長椅子に並んで坐れるように少し足を退いた。「そっちの椅子はだめですわ。こわれてますの。〔後略〕」

〔…〕 et il était entré sans frapper dans le salon où *Maria Cross étendue ne se leva pas* ; elle avait même, pendant quelques secondes, poursuivi sa lecture. Puis : 《Voilà, docteur, je suis à vous.》 Et elle lui offrait ses deux mains, écartait un peu ses pieds pour qu'il pût s'asseoir sur la chaise longue : 《Ne prenez pas cette chaise, elle est cassée. 〔…〕》⁹²⁾

後に、彼女はレイモンに対してもほぼ似たような態度をみせるが、そのとき、「少しむき出しになった足の上に部屋着の裾をかき寄せた」 Elle ramena sa robe sur ses jambes un peu découvertes⁹³⁾ のは、恥じらいと同時にレイモンを挑発するためでもあろう。椅子がこわれたままに放ってあるのも、生来のものぐさによるだけでなく男客を身近に引寄せるためであらう。いつもカーテンを閉めた薄ぐらい客間の長椅子に身を横たえ、タバコをふかすか本を読んでいるこの女の姿には、男性あるいは世間への挑発と拒絶がよみとれる。誇りたかい挑発となげやりの自棄。おとなしく捕らえられたようでいながら、いつ起きあがって攻撃に出るかもしれない獲物の姿勢。マリアはテレーズにみたような丸くうずくまったかたち、完全な防御のかたちはとらない。むしろこの姿勢は、反撃のための潜勢力を蓄える、待機あるいは雌伏に他ならない。

レイモンの情婦の一人は次のように言う。

89) *ibid.*, p. 801.

90) *ibid.*, p. 800.

91) *ibid.*, p. 801.

92) *ibid.*, p. 761.

93) *ibid.*, p. 821.

恋をしていて、苦しいときは、丸くなるの、待ってみるの。

En amour, quand je souffre, *je me mets en boule*, j'attends.⁹⁴⁾

この言葉が頭にあったのか、レイモンも似たようなことを考える。

「丸くなるんだ」彼は自分にくり返す——「長くは続かない。終るまで、気長に待つのだ。浮き身をするのだ。」

《*Mets-toi en boule*, se répète-t-il, ça ne durera pas ; en attendant que ce soit fini, *drogue-toi ; fais la planche.*》⁹⁵⁾

これは、マリアに再会して燃えあがった肉欲の炎について述べられており、虐げられた女たちがとる姿勢とは意味がちがうが、いずれも追いつめられた獲物の姿勢に似ているといえよう。マリアはこのように身を丸く縮めることはない。我々には、その横たわる姿は神話の人物のようにみえる。彼女の自己の神話化については既に述べた（「Ⅱ. 狩猟(1)」参照）。彼女はそこで自らを「オリオン」Orion⁹⁶⁾に喩えたが、別の箇所では自らのことを「ガラテア」Galatée⁹⁷⁾とひき比べて考える。レイモンは、17年ぶりに出会ったマリアの年をとらない美しさのなかに「永遠の子供時代」*enfance éternelle*⁹⁸⁾を認めて、次のように言う。

女はそこにいる、そっくりそのままの姿で。知られざる情熱の17年の後に、かわることなく。「宗教改革」の炎も、「恐怖政治」の炎もその微笑を変えることができなかったあの黒い聖母たちのように。

Elle était là, toute pareille, après dix-sept années de passions inconnues, comme ces vierges noires dont aucune flamme de la Réforme ni de la Terreur ne put altérer le sourire.⁹⁹⁾

94) *ibid.*, p. 856.

95) *ibid.*, p. 860.

96) *ibid.*, p. 819.

97) *ibid.*, p. 827.

98) *ibid.*, p. 742.

99) *ibid.*

そのマリアは、17年前も今も「相変わらずあのものを問いかける眼、あの光りかがやく額」
Toujours ces yeux qui interrogent, ce front plein de lumière¹⁰⁰⁾ をもっている。この問いかける眼と知的な額をもつ女について、17年前、少年のレイモンは次のように述べている。

だがその女は、レイモンを不思議な顔で見つめていた。同時に知的でも動物的存在でもある顔で。そうだ、不可思議で、非情な、笑いを知らない獣の顔だ。

Mais cette femme-là le contemplait avec *une face étrange, à la fois intelligente et animale, oui, la face d'une bête merveilleuse, impassible, qui ne connaît pas le rire.*¹⁰¹⁾

レイモンだけが半獣神、あるいは半獣半人の怪物なのではない。マリアもまた半獣半人の「同時に知的でも動物的存在でもある」謎の存在、人間の枠を超えた不可解な存在なのだ。しかもいつも身を横たえているその姿は、スフィンクスを想起させないだろうか。マリアというスフィンクス的存在の神秘的な美貌に魅せられ、その挑発と拒絶に験され、翻弄されて、ポールとレイモン父子は天使と獣のあいだを揺れうごくが、そのどちらにもなりきることはいかならない。マリアも彼らとかわらない。彼女はレイモンを狩の獲物のように手なづけ、誘惑しようとするが、自らそれをあきらめる。

ガラテア（乳白の女）¹⁰²⁾ は50人の海のニンフ（ネレイス）の一人で、キュクロプス（一つ目巨人）のポリュペーモスに求愛されるが、彼が余りにも醜かったのでファウヌス神とニンフのシュマイティスの子・羊飼いのアーキスのもとへ逃げる。一説では、ポリュペーモスがポセイドンの息子とわかったとき、彼女の軽蔑は用心深い親切に変わったという。他の説では、彼女はポリュペーモスの欲望に屈して3人の息子をもうけたという。

ガラテアは彼女を恐れさせるものから逃げるが、それは同時に彼女の求めているものでもある……

Galatée fuit ce qui la terrifie qui est aussi ce qu'elle appelle...¹⁰³⁾

「彼女を恐れさせるもの」とは、マリアに対する欲望のために醜い獣の顔にかわったレイモ

100) *ibid.*

101) *ibid.*, p. 771.

102) Joël SCHMIDT, *op. cit.*, p. 131.

103) I, p. 827.

ンであるが、それは同時に神話の醜いポリュペーモスを暗示している。マリアはレイモンを所有するために呼び寄せながら彼から逃げ、一人になると遠ざけた彼を渴望して煩悶する。

自殺をはかったマリア（彼女はそれを否定するが）は、診察に来たポールに赤裸々な告白をする。「私たちと対象とのあいだには、さわること、抱きしめることよりほかには道がついていない……つまるところ、肉の歓び以外には！」il n'est aucune autre route entre nous et les êtres que toucher, qu'êtreindre... la volupté enfin!¹⁰⁴⁾ にもかかわらず、

私は快樂と歩調があうようにできていないのです……でも快樂だけが、私たちの求めている対象を忘れさせ、この対象そのものになるというのに。「獣におなりなさい」って、それは言うに易しですわ。

Je ne suis pas à la mesure du plaisir... Lui seul pourtant nous fait oublier l'objet que nous cherchons, et il devient cet objet même. “Abêtissez-vous”, c'est facile à dire.¹⁰⁵⁾

「信仰についてのパスカルの教訓を彼女が肉の歓びに適用するのは興味をそそる、とドクトルは考える」le docteur songe qu'il est curieux qu'elle applique à la volupté le précepte de Pascal touchant la foi¹⁰⁶⁾ のだが、このパスカルの教えとは、『パンセ』*Pensées* の次の断章を指すのであろう。（ブランシュヴィック版・358）

人間は、天使でも、^{けだもの}獣でもない。そして、不幸なことには、天使のまねをしようとおもうと、獣になってしまう。¹⁰⁷⁾

L'homme n'est ni ange ni bête, et le malheur veut que qui veut faire l'ange fait la bête.

『愛の砂漠』の人物はほとんど動物に喩えられ、お互いに「狩る者－狩られる者」の役割りを代わる代わるつとめながら互いの愛を求めあう。そして、一人一人の内と外に拡がる砂漠、愛する対象から彼らを距てる空虚を越えようとして、聖人と俗人、天使と獣のあいだをさまよいつづけるのである。

104) *ibid.*, p. 838.

105) *ibid.*

106) *ibid.*

107) 前田陽一訳、『パスカル』、『世界の名著』24, 中央公論社, 1966, p. 207.

最後にレイモンの自殺の企てについて述べておきたい。なぜ彼は自殺しようとしたのか、その理由が十分に描かれていないのはこの小説の欠点の一つであり、またそのために、なぜ彼が自殺を思いとどまったのかもよく分からない。

彼は初め、父親のピストルで死のうとするが、「神は彼が弾丸を見つけることを望まなかった」*Dieu ne voulut pas qu'il en trouvât les balles*¹⁰⁸⁾ので、草原にある溜池で入水自殺しようとする。(ここで「神」*Dieu*が登場することもやや唐突で、説得力に欠けると言わねばならない。)

その水の上を蚊が飛びまわっていた。蛙が、小石のようにこの動く闇をかき乱した。水草にからまれて、一匹の獣の死骸が白かった。その日、レイモンを救ったのは、恐怖ではなくて、嫌悪だった。

*Des moustiques dansaient sur cette eau ; des grenouilles, comme des cailloux, troublaient cette ténèbre mouvante. Prise dans des plantes, une bête crevée était blanche. Ce qui sauva Raymond, ce jour-là, ne fut pas la peur, mais le dégoût.*¹⁰⁹⁾

この「嫌悪」*le dégoût* はどこからきたのか。白い獣の死骸からと思われる。どんな獣かは示されていないが、家族や愛する人から犬などの動物のようにみられ、自分でもそのことに気づいているレイモンが、ぎりぎりの所で、死んだ獣のようになることを拒んだのである。

補註 (脚註への補足)

8) この小説の冒頭、プロローグにあたる箇所(作者からのテレーズへの呼びかけ)に同じような表現がある。「幾たび、家庭の生きた格子ごしに、私は眼にしたことだろう、おまえがしのび足で、ぐるぐると歩きまわる姿を」*Que de fois, à travers les barreaux vivants d'une famille, t'ai-je vue tourner en rond, à pas de louve [...]. (ibid., p. 17.)*

9) テレーズについて、同じ内容の表現がある。「猟犬の群れが近づくのを目にしながらうずくまっている獣」*bête tapie qui entend se rapprocher la meute [...]. (ibid., p. 73.)*

69) ポールを犬に喩える別の一行:「犬が土に埋めた骨を掘り出すように、彼は自分の想像の世界へまよいもどるのだった」*comme un chien retrouve l'os enterré, il revenait à ses imaginations [...]. (ibid., p. 779.)*

108) I, p. 757.

109) *ibid.*